

### 3. 桐生地域の祭礼・行事に見る歴史的風致

#### □ はじめに

本市には、前述の桐生祇園祭や多びす講をはじめ、伝統的な祭礼や行事が多く継承されている。特に、彦部家住宅のある広沢町の賀茂神社、桐生織物発祥の地と言われる川内町の白瀧神社、機屋も多い東地区の日限地蔵尊では、それぞれ地域に根付いた祭礼・行事が古くから継承されている。

県内有数の古社である賀茂神社では、毎年4月と10月には、文化12年（1815）より続くとされる太々神楽、毎年2月3日には、江戸時代末期より続くとされる御篝神事がそれぞれ行われている。太々神楽は、厳粛ながらも娯楽性が高いものが多く上演され、また、御篝神事は、幻想的で神聖な雰囲気醸し出す。

白瀧神社では、毎年8月に太々神楽が奉納される。起源は定かではないものの、江戸時代のもと考えられる面が現存している。神聖な境内の雰囲気と、神楽の音により歴史的な雰囲気を醸し出す。

日限地蔵尊では、毎月24日に、大正5年（1916）より一度も欠かすことなく縁日が開催されている。縁日の日には、市内はもとより、市外、県外からも参詣者が訪れ、大変なにぎわいを見せている。

これらの祭礼・行事は、地元の住民や市民によって受け継がれ、広く親しまれているものである。それぞれに違った趣とともに、歴史ある各社寺を舞台とし、歴史的な風情を醸し出している。

|                    | 建物と町並み                  | 営み                          |  |
|--------------------|-------------------------|-----------------------------|--|
| 桐生地域の祭礼・行事に見る歴史的風致 | (1)<br>賀茂神社に見る歴史的風致     | ①賀茂神社周辺の環境<br>②県内有数の古社－賀茂神社 | ③賀茂神社太々神楽<br>④賀茂神社御篝神事                       |
|                    | (2)<br>白瀧神社太々神楽に見る歴史的風致 | ①川内町の環境<br>②桐生織物の発祥の地－白瀧神社  | ③白瀧神社太々神楽<br>○白瀧神社太々神楽の奉納と演目<br>○白瀧神社太々神楽保存会 |
|                    | (3)<br>日限地蔵尊縁日に見る歴史的風致  | ①観音院とその周辺の環境                | ②日限地蔵尊縁日                                     |

桐生地域の祭礼・行事に見る歴史的風致の体系図

## (1) 賀茂神社に見る歴史的風致

本市の南西の広沢町に位置する賀茂神社<sup>かもじんじや</sup>では太々神楽<sup>だいたいかぐら</sup>や御簀神事<sup>みかがりしんじ</sup>が行われ伝統を今に伝えている。

### ① 賀茂神社周辺の環境

広沢町は、北は渡良瀬川<sup>わたらせ</sup>を境とし、南は八王子丘陵で太田市と隣接している。八王子丘陵中央付近の北斜面の、うっそうとした森林の中に賀茂神社が鎮座している。また、彦部家住宅は賀茂神社のやや北側の広沢町内に立地している。



広沢町の位置

神社に隣接して、南東には別当であった法楽寺、北には、立派な門構えと板塀に囲まれ代々神官を務めた旧家の飯塚家住宅が隣接している。近代和風の邸宅と純和風庭園は、要人や来賓をもてなすために飯塚春太郎<sup>いづかはるたろう</sup>により昭和3年（1928）に建てられたものである。春太郎は桐生の織物業に大きく貢献し、国会議員としても活躍した。飯塚家住宅は令和4年に解体され現在は滅失している。道を挟み立地している大谷石造の6連のノコギリ屋根工場は、旧飯塚織物工場で昭和7年（1932）に建てられたものである。初期洋風建築を伝える建造物で、輸出向けの高級織物を生産していた。現在は私設博物館として活用されている。



法楽寺



建設当時の飯塚家住宅  
(出典：桐生の人と心)



旧飯塚織物工場



賀茂神社境内の配置と神社周辺の状況

② 県内有数の古社—<sup>かもじんじや</sup>賀茂神社

賀茂神社は、<sup>こうざけのくにえん ぎしきないしや</sup>上野国延喜式内社十二社の内のひとつであり県内有数の古社として千年以上の歴史を持つ。創立年代は不詳であるが、社伝によれば<sup>すじん</sup>崇神天皇の御代、<sup>とよきいりひこ</sup>豊城入彦命が東国鎮護のため山城国賀茂神を勧請し、<sup>かんじょう</sup>桓武天皇の延暦15年（796）、美和神社とともに官社に列せられたとされる。寛治元年（1089）の<sup>きよはらのたけひら いえひら</sup>清原武衡・家衡の反乱の際、源義家は反乱軍追討にあたり当社に祈願し、平定後凱旋の際は、<sup>ほうへい ぶがく</sup>奉幣<sup>32</sup>の舞楽を奏したとも伝えられ、舞楽奉獻の円台の遺跡が今も残っている。

広い境内には、鳥居をくぐって正面奥に拜殿、幣殿、その奥に本殿、社殿手前の左手に神楽殿と<sup>みこし</sup>神輿殿、右手に直会殿と社務所が建

つ。現在の社殿は昭和2年（1927）に再建されたものである。拜殿は間口5間、奥行2間、本殿は、方1間の流れ造りで華麗な彫刻が施



賀茂神社



賀茂神社境内

32) 神にささげること

されている。本殿横には、「永和四年」（1378）の刻銘のある市内では最も古い石灯籠（市指定重要文化財）が建っている。境内の背後には、豊かな自然林が広がり、モミ群が群馬県の天然記念物に指定されている。

毎年、神楽殿では「賀茂神社<sup>だいだいかぐら</sup>太々神楽」が奉納され、社殿前の広場においては、「賀茂神社御<sup>みかがりしんじ</sup>篝神事」が行われている。



石灯籠

### ③ 賀茂神社太々神楽<sup>かもじんじだいだいかぐら</sup>

太々神楽が奉納される神楽殿は、社殿に向かって左側の石垣上に建ち、間口2間、奥行4間の切妻素木造りで、神楽の始まりと同年頃の建築とされ、明治時代、昭和60年（1985）頃に改修しているという。踊<sup>おどりめん</sup>面は2間四方で上手と下手に出幕がある。三方開放で、祭礼時には、注連縄<sup>しめなわ</sup>を張り、紙垂<sup>しで</sup>を巡らせ、神紋<sup>しんもん</sup>二葉葵<sup>ふたばあおい</sup>の紋幕が張られる。踊面後方には、2間四方の楽屋があり、神楽面や衣装等が收藏されている。

神楽の起源について、社伝によれば、文化12年（1815）に神主の飯塚伊豆正<sup>いづかいずのかみ</sup>が催主となり、氏子や地元有力者140人の奉加<sup>ほうが</sup><sup>33</sup>を受けて道具一式を整えたとされる。この時の神楽連からの奉納額も残されている。この時の神楽は、桐生地方の交流ある5社の神職によって組織された「桐生座」によるものだった。明治維新後に一時休止したが、明治15年（1882）

に「敬神宮比講社」を創立し、氏子中の長男によって奉納上演や依頼奉納の伝承活動を続けてきた。その後、神楽師の高齢化や後継者不足から、伝承されずに演目のみとなった舞もあるが昭和48年（1973）には賀茂神社太々神楽保存会が組織されたため、今日まで複数の舞が継承されている。会員は、20歳代から70歳代の12名であるが、毎月1日と15日の練習会を通年で実施し、会員の子どもや孫への継承も積極的に行われている。

昭和20年（1945）までは毎年4月14日を春期例祭、10月14、15日を秋期例祭として、神楽が奉納されていた。戦後は、4月14、15日及び10月15日頃の土、日曜日に行われている。賀茂神社で演じられる神楽は、宮比神楽<sup>みやび</sup>と言われる里神楽である。宮比とは、神楽の祖とされる天鈿女命<sup>あめのうずめのみこと</sup>を大宮姫と言うことから来たものである。

例祭当日は、社殿での厳粛な雰囲気の中で神事が執り行われる。終了を知らせる太鼓が打ち鳴らされ、境内に響くと、続いて神楽



賀茂神社神楽殿



神楽連からの奉納額

33) 神仏に金品を寄進すること

殿において五囃子（八社・昇殿・鎌倉・四丁目・仁羽）演奏が行われる。参加者や観衆に対して、神楽が始まる前の呼び込みのため工夫された軽やかで心浮き立つ曲調で、景気付けとして行われている。



例祭神事の様子



例祭神事の様子

神楽は、式舞（表舞）12座、狂舞（裏舞）12座で構成されるが、伝承され、現在演じられているのはそのうち9座である。囃し方は、太鼓1人、締太鼓2人、笛1人、鉦すり2人で構成される。舞手の面は全部で32面あり、始まった当初の年季の入った面を現在でも使用している。

初座舞として、厳粛な式舞「白黒翁の三番叟」が舞台浄めとして演じられる。続いて、神々の登場を意味する「猿田彦（道開け）」を舞う。これ以降は、状況に応じて、演目を選んでの上演となる。狂舞には演目「子守の舞」、「<sup>ひるこ</sup>蛭子の舞」などが演じられている。式舞では、「<sup>くずがみひろ</sup>屑紙拾い三番叟」という全国的に珍しい演目も伝承されている。ひょっとこ面の男が、小脇に籠を持って出て、手に屑拾い

の長い箸を持ち屑拾いしながら踊り、舞台上の長<sup>なが</sup>袖<sup>がみしも</sup>を拾い上げ、やがてこれを着る。その後も、烏帽子や鈴を恐る恐る拾い上げ、次々と身に付けて最後に三番になって舞うという演目である。平成元年（1989）には国立劇場で上演された。



舞手の面



神楽の様子



神楽の様子（上：現代／下：年代不明）

## ④ 賀茂神社御篝神事

毎年、節分の2月3日、火投げ神事という古くから続く伝統行事が行われている。起源は明らかではないが、文政13年(1830)の「賀茂神社傳承記」に神事の記載があることから、江戸時代末期には既に行われていたとされる。



燃え上がる御篝

氏子は、人形に切り抜いた半紙に生年月日、名前を記し、体の悪い部分を撫でて諸病、災厄を移す。それから息を吹きかけ、厄落としと厄除けを祈願する。そろいの白装束を身に



人形の半紙に名前を記入



豆まきの様子

まとった若連は、人形とともに拝殿でお祓いを受けると、鬼に扮した氏子が拝殿の外に逃げ、「鬼は外、福は内」と豆まきが行われる。

境内中央には、薪木等が積み上げられ、その四方に斎竹<sup>34</sup>を立て、注連縄が張られ、紙垂が下げられた御篝場が設けられる。やがて宮司が、神前の斎火<sup>35</sup>を、お祓いを受けた人形を介して、薪木に点火する。薪木は靈威を湛えた「浄薪」となり、瞬く間に燃え上がった「御篝」によって、境内は真っ赤に照らされる。

頃合いを見て、氏子は、火の付いた浄薪を持って、御篝を挟んで左右(東西)に分かれ対峙する。全体が見渡せる位置に責任者と太鼓が配され、全ての準備は整う。

白い手袋をはめた氏子たちは、浄薪をわしづかみにした腕をグルグルと振り回し、火勢を強めながらその時を待つ。太鼓の音が鳴ると、全員が大声を発しながら、対峙した氏子の方にめがけて一斉に浄薪が放たれる。浄薪からは、無数の赤い火の粉が飛び交い、境内に降り注ぐ。一本目を投じた氏子たちは、対峙した氏子が投じた浄薪を拾い上げ、また、腕を振り回し、火勢を強め、次の号令を待つ。体勢が整い、太鼓が鳴ると、二本目が夜の空に放たれる。これを複数回繰り返し、御篝の火勢の状況で、休憩を挟みながら3セット行



火投げの様子

34) 神事の際にけがれを防ぎ清める場所に立てる竹  
35) けがれを清めた火

う。最後に、氏子たちは燃えたぎる御篝を囲んで、手締めで終了する。

氏子たちによって投げ放たれた浄薪が、境内の木に引っかかることや、観客の方へ飛び込むこともよくあるが、お祓いされた浄薪は、昔から決して怪我をしないとされている。

昭和20年代には、一時、喧嘩火投げのような状況が横行し、火投げのない静かな神事が行われたこともあったというが、現在では賀茂神社御篝神事保存会が結成され、指示系統やルールを作りがなされ、安全に配慮しながら実施されている。保存会のメンバーは、全国大会にも出場する地元の強豪野球チーム「広六クラブ<sup>みとらしかい</sup>御弓会」のメンバーが中心となって、氏子有志で組織され、結束も固い。

大晦日直前の日曜日には、多くのメンバーが集まり、早朝から社殿や境内周辺を含めた清掃を行っている。極寒のなか、本殿周囲の玉砂利を1つずつ丁寧に泥さらいするのが恒例となっている。神とともに清廉な気持ちで新たな年を迎えるという意味がある。この奉仕から御篝神事の始まりとも言える。

節分直前の日曜日には、早朝から御篝場作りが行われる。材料となる薪木は、かつて明治初期までは、境内の社木の枝を伐採してい

たが、森蔽に差し障るため禁止された。以後、境内の枯れ枝や倒木を集め使用していたが、現在では外部から<sup>なら</sup>檜の木を集めている。御篝場には、氏子から託された古宮、正月飾り、古ダルマなども積まれ、3メートル程度の高さになる。この準備を経て2月3日の本番を迎える。

このように、先人から伝わる御篝神事を通して培われた活動は、地域づくりや人づくりにも広がり、この地域における良好なコミュニティを図る機会にもなっている。

身も凍える寒さのなか、深々とした空気を明るく染めあげる御篝と、弧を描いて飛び交う浄薪から降り注ぐ火の粉が舞うとき、周囲を埋め尽くした観客は魅了され、大きな歓声が沸く。まさに勇壮で特異な奇祭が繰り広げられている。



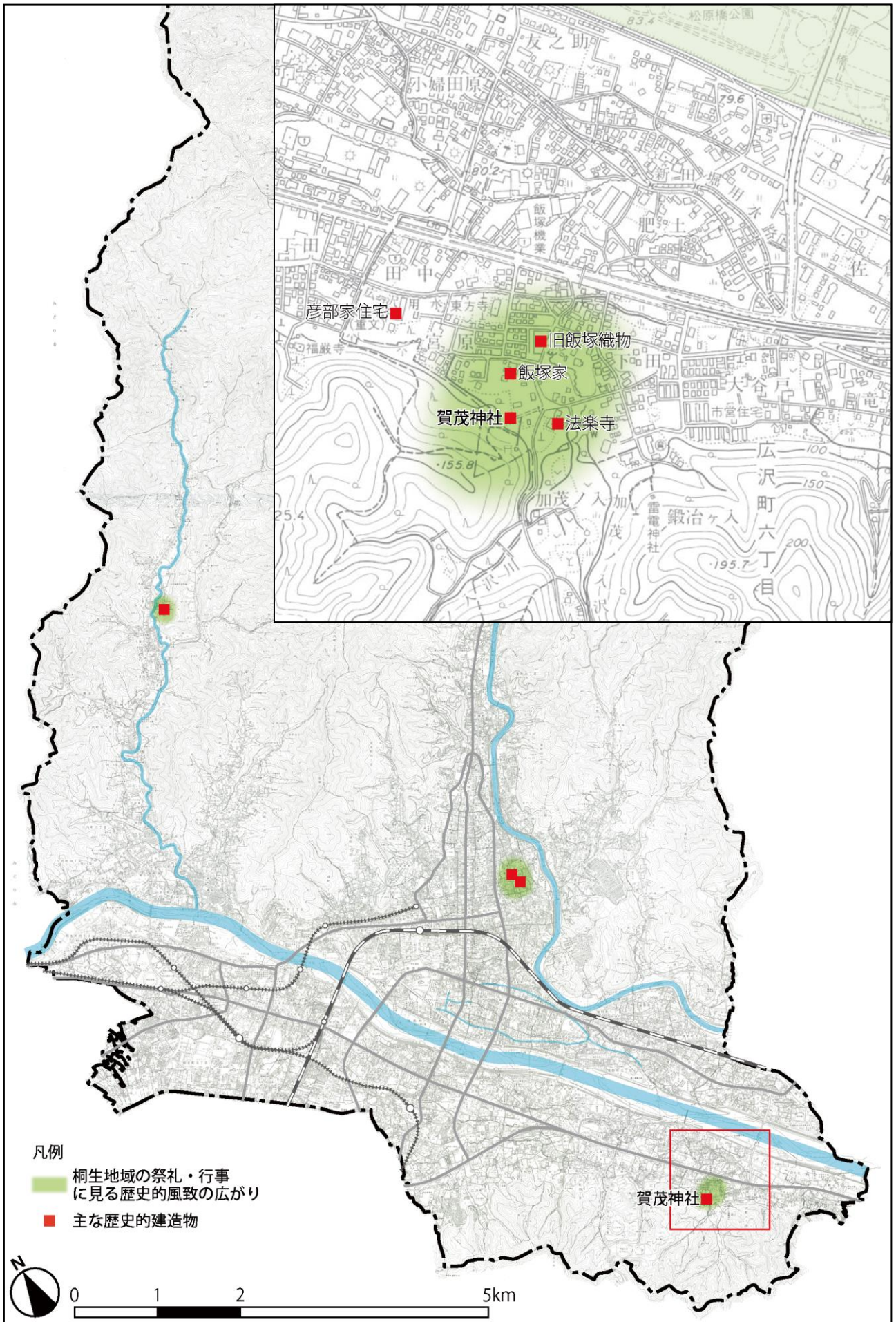
奉仕活動の様子

### □ 県内有数の古社で行われる2つの祭礼・行事

県内有数の古社である賀茂神社の氏子は広沢町六丁目の住民達である。氏子や賀茂神社太々神楽保存会、賀茂神社御篝神事保存会の活動によって、娯楽の少なかった時代から、今も昔も変わらず、地元民の楽しみ方の1つとして見る者の心をひきつけ夢中にさせてき

た太々神楽、神域から幻想的で神聖な雰囲気醸し出される御篝神事の2つの祭礼・行事や、その舞台となる賀茂神社を中心とした歴史的建造物が古くから継承されてきた。

賀茂神社を中心として、氏子や保存会の活動によって歴史的風致が広がっている。



賀茂神社周辺の歴史的風致の広がり



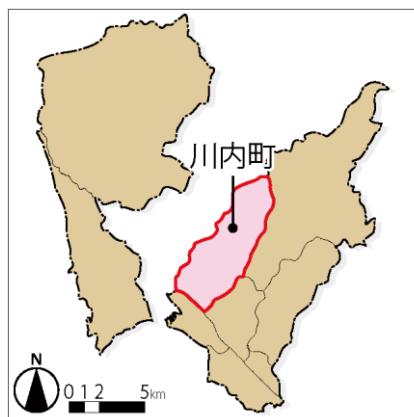
## (2) 白瀧神社太々神楽に見る歴史的風致

桐生地域の北西に位置する川内町では、桐生織物発祥の地とされる白瀧神社において太々神楽だいだいかぐらが行われている。

### ① 川内町的环境

川内町は、南は渡良瀬川わたらせを挟んで相生町、東は吾妻山あづまやまや鳴神山なるかみやまなどを挟んで堤町、宮本町、梅田町とそれぞれ接しており、また、西から北にかけては、みどり市大間々町おおままとなっている。明治22年（1889）の合併により川内村となったが、村名は渡良瀬川の内側にあることから名付けられた。

川内町の中央を山田川が南北に流れ、その左岸に白瀧神社が立地している。また、水路や水車の多かった東地区しんしゅくや新宿とともに、ノコギリ屋根工場が多く分布している地域である。



川内町の位置

### ② 桐生織物の発祥の地—白瀧神社

白瀧神社は、織物産業に見る歴史的風致で述べたとおり、織物の神である天八千々姫あめのやちちひめの命みことに白瀧姫命しらたきひめのみことの2柱が主祭神として祭られている。社殿は、本殿、拝殿、祓殿、社務所で構成されている。創建は不明だが、現在の社殿は明治初年頃に修造されたものである。また、社殿の背後には御神木である樹齢300年以上と伝えられる「白瀧神社のケヤ

キ」（市指定天然記念物）がそびえ荘厳な雰囲気醸し出している。

「白瀧神社太々神楽だいだいかぐら」（市指定無形民俗文化財）を奉納する神楽殿は、社殿に向かって左手に所在している。木造の鉄板葺寄棟屋根を持つ間口2間、奥行3間、約6坪の神楽殿である。建築年は奉納額から明治45年（1912）7月落成とある。なお、地元では他所の地から移されたとも口承されている。神楽殿向かって右隣には、神楽面、衣裳、小道具等を保管する建物が建っているが建築年は不明である。



白瀧神社神楽殿



白瀧神社境内の配置

### ③ しらたまきじやだいだいかぐら 白瀧神社太々神楽

#### ア. 白瀧神社太々神楽の奉納と演目

白瀧神社太々神楽は、白瀧神社に古くから伝わる神楽である。毎年8月の第1週土曜日の白瀧神社例大祭に神社境内の神楽殿で奉納されている。

8月の例大祭に向けて、約1か月前から週1回程度の練習が実施されている。神社の社務所に夜間集まり、神楽殿と同じ配置になるよう太鼓を設置する。それから、鼓のひもを締め、神楽鈴などの準備と小道具の設置を行い、本番さながらの練習を行う。初めて舞うメンバーには、指導者が手本となり、足使い（舞振り）や鈴の振り方など細かく手ほどきを行う。笛は譜面（ジゴト）がないため、習得まで一番時間がかかるという。メンバーは、一人が何役もこなすことができ、舞ごとに役を入れ替わりながら自分の動きを確認する。本番までに4～5回程度のおさらい程度で本番に臨めるという。練習後にはテーブルを



奉納される白瀧神社太々神楽



練習の様子

囲んで、本番で演じる舞を決めたり、早くも次回出演の打ち合わせも行う。

前日までに、神楽殿の紅白幕の準備や、舞の最中に観客にまかれる切り餅の準備も行われる。切り餅は、「種蒔之舞」と「上棟式」の際に、観客に向けてまかれるものであるが、以前は、半紙に包まれ熨斗の巻かれた菱形の餅や菓子類をまいた時もあったという。

祭礼当日には、注連縄に紙垂が付けられ、開演を待つ。舞台裏では、それぞれの装束を身にまとい出番を待つ。

神楽殿で、式舞は大祓詞の奏上により始まる。四方を祓い清めた大幣を手に宮司は平舞の囃子で「官司之舞」を厳かに舞う。舞終わり神前に着座し「翁」を待つ。翁が登場し、官司から幣束が渡され、第壹座「翁之舞」が始まる。楽器は太鼓、胴長締太鼓、笛の二鼓一管である。囃子は出囃子、三ツ拍子、平舞、早舞、天狐、道化、恵比寿、連打の他に、各々の舞にあわせた囃子で構成されている。

現在伝えられている神楽は、日本神話に題材をとるものが多く、第壹座「翁之舞」から第五座「岩戸開伎之舞」の式舞、第六座「大蛇退治」から第拾貳座「上棟式」までの興舞がある。その他に機織の神を象徴するように糸杵を持って舞う「機神舞」がある。

第壹座に始まり、激しい動きの第五座までの式舞は、順番どおりに演じる。勇壮な第六座から第拾貳座の興舞については、時間やメンバーから調整し、複数の舞を演じる。(各座の概要は別表のとおり)

白瀧神社太々神楽の起源は明らかではないが、現存している面の大半は江戸時代のもので考えられ、24面が残っている。近年まで、その面を使用していたが、現在は復刻面を使用している。現存の記録では、明治21年(1888)の「太々神楽施行願」、明治31年(1898)8月の「神正流大和太々神楽座記録」には十二座の舞の記録が、舞人の姓名とともに記載されている。また、同年、舞人の議定書が定められ第一条から第十条までの



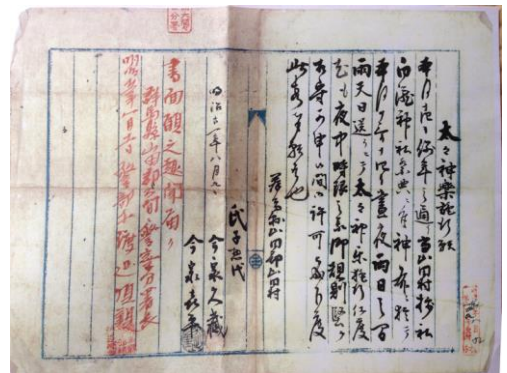
宮司による大祓詞奏上



現存する面



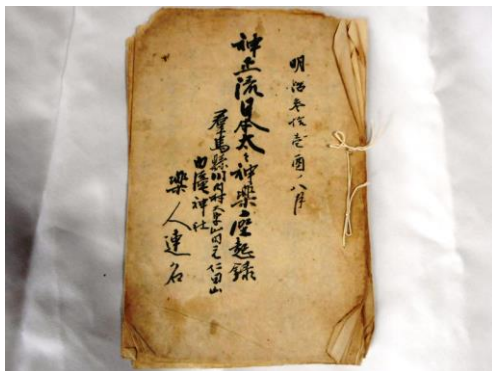
囃子方



太々神楽施行願 (明治21年)

心得が細かに記され署名捺印されている。

元々神楽の目的は神を慰め、鎮魂のためとされていた。それが、伊勢神宮への参詣さんけいに伴い、人々が神楽を奉納するようになっていった。これが代神楽であり、太々神楽と呼ばれるようになる。古式なものほど神降ろし神上げの舞が行われるが、娯楽性を帯びた滑稽な舞も演じられるようになった。宮中で行われる御神楽みかぐらに対し、これがいわゆる里神楽と言われ、この白瀧神社をはじめ、各地の神社などで行われる神楽である。



神正流大和太々神楽座記録（明治31年）

#### イ. 白瀧神社太々神楽保存会

白瀧神社太々神楽は、神社のある川内町に住む長男が代々継承することとされ、戦後の一時期に衰退の危機もあったが、昭和37年（1962）に青年有志により神楽保存会が組織された。保存会には、現在、地域内の30歳代から60歳代の12名の会員が所属し、毎年8月の白瀧神社例大祭をはじめ、11月の「かわうち文化祭」、「ゑびす講」などに定期的に出演するほか、出演依頼を基に各地で演舞活動を行っている。また、各地区で行われる笛の講習会等に積極的にメンバーを参加させるなど継承への取り組みも盛んである。先人が伝えてきた地域の宝を絶やすことなく守り、次世代へ伝えようという意気込みがひしひしと感じられる。

第2章 桐生市の維持向上すべき歴史的風致

白瀧神社太々神楽の舞一覧

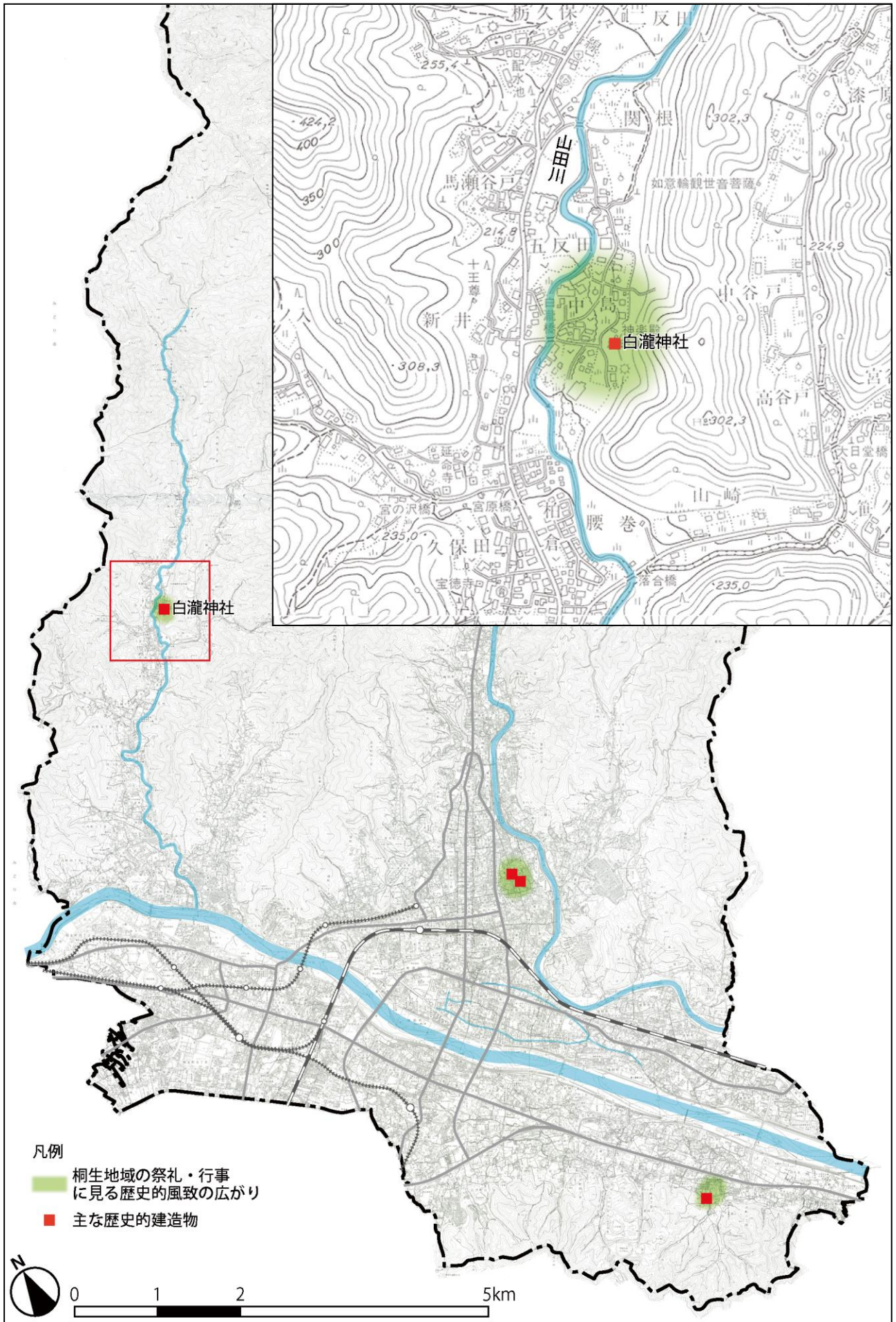
| 座                                       | 演舞                         | 写真  | 座                           | 演舞                  | 写真  |
|---|----------------------------|---|-----------------------------|---------------------|---|
| 概要                                      |                            |   | 概要                          |                     |   |
| 第壹座                                     | おきな の まい<br>「翁之舞」          |    | 第八座                         | たねまきの まい<br>「種時之舞」  |    |
| ○翁が宮司より太幣を受け、鈴を持ち天下泰平、国土安穩、五穀豊穡を寿ぎ一人で舞う |                            |   | ○五穀豊穡を祈願し祝う舞                |                     |   |
| 第貳座                                     | さる た ひ こ の まい<br>「猿田彦之舞」   |    | 第九座                         | えびす の まい<br>「恵比寿之舞」 |    |
| ○猿田彦が剣と鈴を持ち、四方を祓い清め国家繁栄を願い早舞の囃子で舞う      |                            |   | ○恵比寿の神が大きな鯛を釣り上げる豊漁を祝うめでたい舞 |                     |   |
| 第参座                                     | あめの う ず め の まい<br>「天宇豆女之舞」 |   | 第拾座                         | いなやま の まい<br>「稲山之舞」 |   |
| ○天宇豆女之命が幣束を持ち平舞の囃子で鎮魂の舞を一人厳かに舞う         |                            |   | 伝承されず                       |                     |   |
| 第四座                                     | けんぎょく の まい<br>「剣玉之舞」       |  | 第拾壹座                        | かまゆ の まい<br>「釜湯之舞」  |  |
| ○岩戸開き用の剣を、金山彦之命、天狐、天之目一筒命が力を合わせて作り上げる   |                            |   | ○白瀧姫の機神伝説を神楽にしたもの           |                     |   |
| 第五座                                     | いわとびらきの まい<br>「岩戸開伎之舞」     |  | 第壹貳座                        | 「上棟式」               |  |
| ○『古事記』『日本書紀』の神話「天之岩戸」を神楽にしたもの           |                            |   | ○棟上を喜び工事の安全と建物の堅固長久を祈念する舞   |                     |   |
| 第六座                                     | おろちたいじ<br>「巨蛇退治」           |  | その他                         | はたがみのまい<br>「機神舞」    |   |
| ○須佐之男命の八俣の大蛇退治                          |                            |   | ○機織の神を象徴し糸杵を持って舞う           |                     |   |
| 第七座                                     | きじんたいじ<br>「鬼人退治」           |  |                             |                     |   |
| ○大和武之命の鬼人退治の舞                           |                            |   |                             |                     |   |

### □ 桐生織物発祥の地で受け継がれる太々神楽

桐生織物発祥の地とされる白瀧神社は、機神信仰の対象となっているだけでなく、江戸時代から続くとされる太々神楽が、川内町五丁目の山田川流域に暮らす氏子達に代々受け継がれ、毎年奉納されている。太々神楽は今も地元の住民の心にしっかりと染み付いており、太々神楽当日は、うっそうとした神

域に抱かれた境内の神聖な雰囲気と、鳴り響く笛や規則正しい太鼓の音が誘う雰囲気があいまって、歴史的な風情を醸し出している。

このように、氏子や白瀧神社太々神楽保存会の活動によって、白瀧神社を中心として歴史的風致が広がっている。



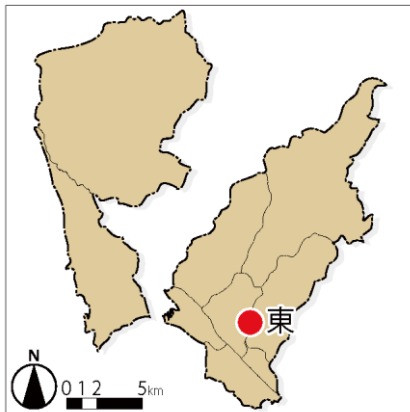
白瀧神社周辺の歴史的風致の広がり

### (3) 日限地蔵尊縁日に見る歴史的風致

市街地の東に位置する東地区では、一般には「日限地蔵尊<sup>ひぎりじぞうそん</sup>」として知られる観音院<sup>かんのいん</sup>において毎月24日に縁日が行われている。

#### ① 観音院とその周辺的环境

東地区は、多くの水路が流れていたことから機屋が多く立地し、後藤織物や森秀織物をはじめとする多くのノコギリ屋根工場が現存している。



東地区の位置

東地区のほぼ中央に観音院が立地しており、桐生では毎月24日といえば「お地蔵様」と言われるほど住民に根付いた縁日が、境内及び周辺で行われている。観音院は、正保元年（1644）の開山で、本尊は聖観世音菩薩<sup>ぼきつ</sup>である。山号は「諏訪山」であるが、道路を挟んだ西側には、大正14年（1925）まで同じ敷地内で神仏習合により一体の関係にあった諏訪神社が鎮座している。諏訪神社は諏訪機神社とも呼ばれ、機神信仰が根付いていることがうかがえる。



諏訪神社

仁王門をくぐった境内には本堂、地蔵堂、鐘楼堂<sup>しょうろうどう</sup>などの御堂が存在する。現在の本堂は江戸時代末期の嘉永年間（1848～1853）の造営で、正面6間半、奥行5間半の寄棟造り本瓦葺き、頂上に鴟尾<sup>しび</sup><sup>36</sup>を配置する。向拝には名工<sup>みろくじおとち</sup>弥勒寺音八による龍・欄間<sup>らんま</sup>、吉田正信筆の格天井画が施されている。お地蔵様は、石造延命地蔵と言われ本堂向かって左手前の地蔵堂の奥に安置されている。地蔵尊は元禄（1688～1704）又は文化・文政（1804～1829）の頃のもので60センチメートルくらいの大きさと言われているが、秘仏であるため詳細は不明である。

田原藩士で後に家老で知られる画家渡邊<sup>わたなべ</sup>崑山<sup>かざん</sup>の妹茂登<sup>もと</sup>は桐生新町二丁目の買次<sup>かいつぎしやう</sup>商岩本家に嫁ぎ、その縁で、崑山は天保2年



本堂



本堂の欄間

36) 瓦葺屋根の大棟の最上部の両端につけられる飾りの一種



(1831)には、ここ桐生やその周辺地域を訪れ『毛武遊記』という紀行記を残している。ここ観音院は、岩本家の菩提寺であり、茂登や、茂登の子で崑山の甥である岩本一僊らの墓は観音院駐車場一角の岩本家墓地にある。寺宝には、崑山奉納の脇差や、一僊が描いた涅槃図（市指定重要文化財）等が収められている。



地藏堂

② ひぎりじぞうせん 日限地藏尊縁日

毎月24日の「日限地藏尊縁日」は、終日参道と周辺道路は通行止めとなり、数十件もの露店が出店し、日用雑貨、植木草花、乾物、たい焼き、焼きそばなどの店が立ち並ぶ。境内には、団子などの和菓子、惣菜品、縁起だるまの販売など多くの地元からの出店でにぎわう。参詣者は、市内はもとより、佐野、足利、太田、渋川方面や遠くは埼玉、東京、千葉、長野方面からも訪れ、大変なにぎわいを見せる。毎月多くの人出があり、とりわけ、1月の初地藏と12月の納め地藏には、1万人を超える参詣者と、多くの露店が立ち並ぶ。最寄りの西桐生駅から観音院までの参詣路にはひっきりなしに人が歩き、人の動きで24日のお地藏様の日であることを認識できるほどである。

参詣者は、日を1週間、半年、1年などと限って、自ら目標成就日を定める。線香をあげたり、絵馬を奉納したり、合掌し、人に語れぬ悩みや不安、健康、厄除け、縁結び等の

思い思いの願いをする。毎月24日の継続した月詣りの参詣祈願で大願成就が得られるという。

この縁日は、『桐生市史』によると、地藏堂を建立した大正5年（1916）6月に、当時の住職が始めたされている。その時から、現在まで一度も欠かすことなく続けられているという。

日限地藏尊御利益の由緒は複数伝承されている。以下がその一説である。

その昔、この近くに大きな機屋があり、朝から夜遅くまで工女が働いていた。工場の窓を見ると、毎晩、大入道の姿が見えるので、不思議に思った主人は外へ出ていくが、影も姿もない。ある夜、不審に思った主人が、火縄銃を見舞わずと確かに手ごたえはあったが、やはり影も姿もない。気味悪く寝られずに一夜を過ごした主人は、翌朝その現場に行ってみると血の跡が点々とあり、それを辿ると観音院の本堂前で消えていた。てっきり狸の仕業だと思っていると、ある晩、夢に地藏



周辺の参道の様子



にぎわう境内

尊が現れ「衆人を守護するためにぜひお堂を建てて欲しい。そうすれば、何日と日を限って願かけすれば必ず願いをかなえよう。」とお告げがあった。主人は、さっそく村人の強

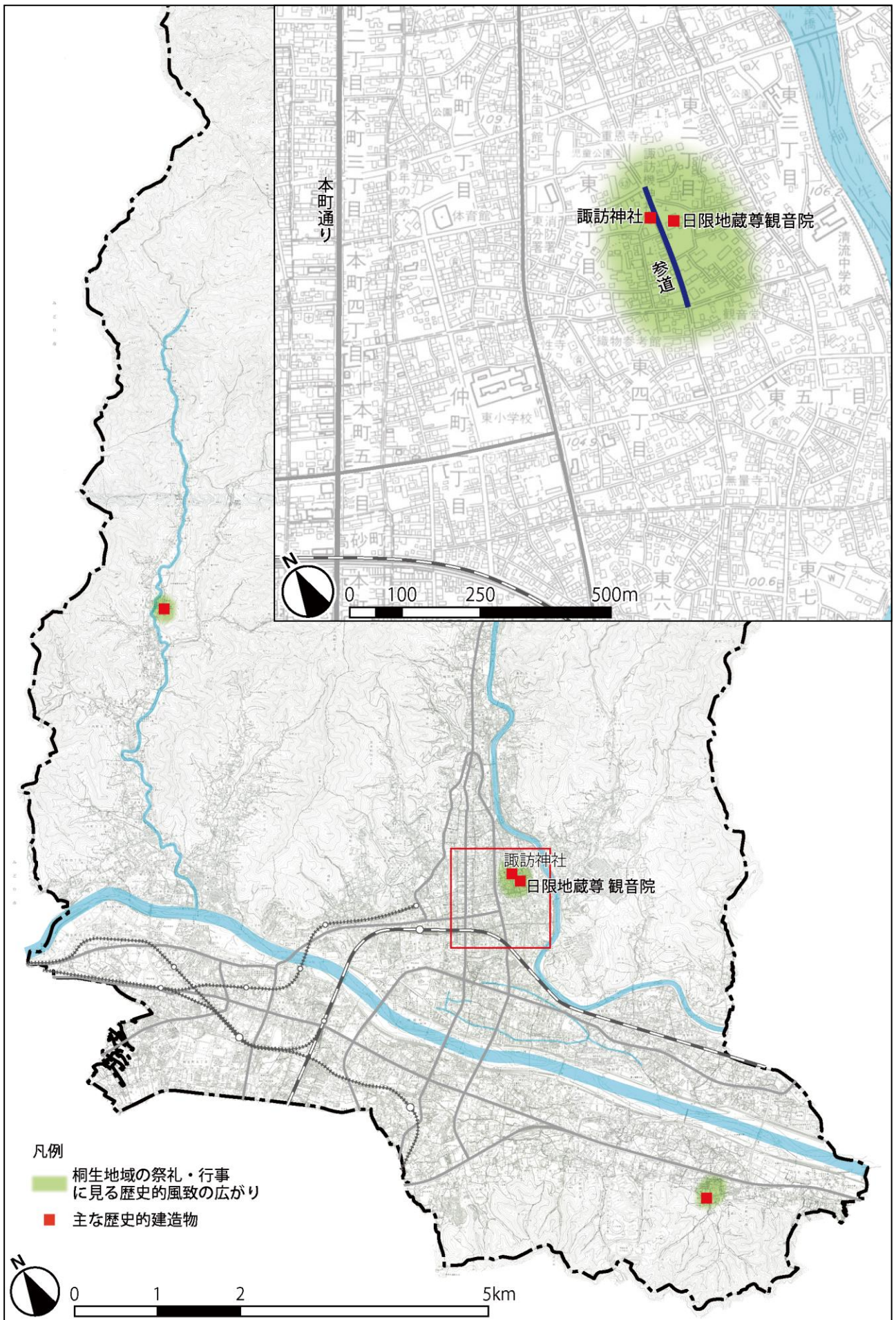
力を求め、お堂を建てて法要と祈願を行った。不思議にも地蔵には鉄砲の弾の跡が残っていたという。（『桐生市史』より）

#### □ 地域に根付く民間信仰の象徴

地域に根差し、毎月恒例の行事として、大正時代から続く縁日は、桐生の民間信仰の象徴ともなっている。24日の縁日以外の日でも、香煙は絶えることなく、願い事に訪れる参詣者は多く、厚い信仰を集めている。香煙が立ち込める境内周辺には、霊場としての心洗われる厳粛さのなかにも開放的で活気ある雰

囲気が漂っている。縁日の当日は、観音院の境内に限らず、周辺の参道などにも露店が立ち並び、一体的なにぎわいをみせており、地域への広がりが見られる。

このように、観音院を中心に、露店が立ち並ぶ参道や、かつては一体であった諏訪神社を含む周辺に歴史的風致が広がっている。



日限地藏尊周辺の歴史的風致の広がり

## 【コラム⑤：堀マラソンと球都桐生】

桐生の近代化に貢献した桐生人の1人として堀祐織物工場の創業者堀祐平ほりゆうへいがいる。堀は、明治10年（1877）、長野県上高井郡井上村（現須坂市）で生まれ、独学で織物の意匠の技術を習得し、20歳の時に知人の紹介で桐生町へ来た。堀祐織物工場は明治38年（1905）、桐生駅の南側で操業開始した。現在は、昭和2年（1927）建築の旧堀家住宅主屋や蔵が残り、国の登録有形文化財となっている。主屋は飲食店として転用されている。

また、堀は上毛電気鉄道や桐生教会の建設などにも尽力し、織物同業組合評議員や市議会議員も務めた。



旧堀家住宅



堀祐織物工場鳥瞰図（昭和初期）

とりわけ、スポーツへの貢献が大きく、市民からは「スポーツの父」と讃えられている。堀の数々の功績を顕彰する頌徳碑が建立された昭和28年（1953）より、「堀マラソン」が開催されている。現在のコースは、新川公園しんかわを発着点として、本町通りを北上し、桐生新町伝建地区の古い町並み、桐生発祥の地である梅田、堀自身が建設に尽力した桐生教会を巡るコースである。

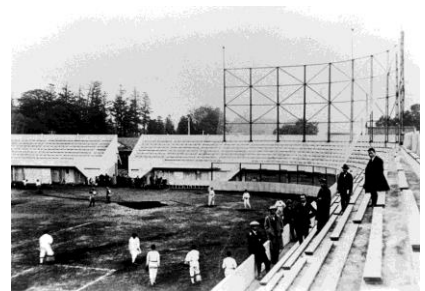
堀マラソンの発着点である新川公園は、

かつては野球、陸上、テニス、水泳ができる北関東随一の総合的な体育施設「新川運動場」であった。堀は昭和2年（1927）に設立された桐生市体育協会（現桐生市スポーツ文化事業団）の初代会長に就任すると、自ら指揮を執り、多額の私財を寄附するとともに、全国から寄附金を集め、昭和3年（1928）に新川運動場が整備された。その後、昭和9年（1934）には、堀ら所有者から市へ運動場施設が寄附された。

この運動場は、球都桐生の基礎を築き、桐生のスポーツ振興に大きく貢献してきた。その後、野球専用の新川球場となったが、昭和62年（1987）に新川球場は解体され、跡地が新川公園として整備された。



桐生新町伝建地区を駆け抜ける堀マラソン



昭和3年に完成した新川球場



頌徳碑除幕式当日の堀祐平と前原市長（昭和28年）